

苺の中休み・株疲れの軽減対策について

R2.12 アグリ技研（株）

「中休み現象」（果房間の収穫期の遅延）

1. 中休み現象とは （品種的な、特徴格差はあります）
- ・ 1番果の分化や収穫の前進化するほど2番果は遅れ気味となる。
 - ・ 年内栄養生長で推移するほど2番果の遅れ気味となる。
 - ・ 草勢に対して収穫量の多い場合なども遅れ気味となる。

「株疲れ現象」（2番果以降の生育の停滞や矮化）

2. 株疲れ現象とは
- ・ 着果過多や負担による芯葉の展開遅れや生育停滞や鈍化。
 - ・ 2、3番果の果実の肥大や収穫遅れ。
 - ・ 地温低下による根群の減少、傷みによる矮化や中休み現象。

「中休み・株疲れ現象」対策

定植期	・ 元肥の減肥、定植後の遮光、クラウン部冷却、定植期の遅延
年内～ 厳寒期	・ 摘花、果（株の大きさや生育量に応じた果数調整）
	・ 炭酸ガス施用（積極的な施用・日中450ppm以上の濃度維持）
	・ 日中の適正温度管理（炭酸ガス施用を生かす午後までの25～27℃維持）
	・ 展葉前進化の為にジベ処理（葉の回転を良くする）
	・ 電照の調整（徒長抑制コントロールでの生育調整）
	・ 炭酸ガス転流促進の前夜温確保（晴天日の日没3時間を高く）
	・ 夕方、早朝加温（矮化・草勢維持対策の2時間程の高めの温度管理）
	・ 光合成活性化での2割前後の水や肥料の増肥
	・ アミクエやフショクフルでの根域活性や土壌環境改善
	・ コラーゲン・ラボ、クドグリーンでの光合成の活性化